



助手共闘

今日二十一日より四年次生のみの授業再開と称して行なっている学内警備に対し、われわれは多くの疑問を持たざるを得ない。

まず、大学の「平常にもどす」とは、どういふ何を指して平常と云うのであるか。中に夏季休暇を挟んだとはいえ、六月から教えて五月の末まで今日に至っている。十一月十七日の左藤訪来までに行なわれた、信濃と学生との市街における衝突のみをこらえた社会問題として、自らの内(大学)にある矛盾から発生したものであることに対し、何ら思考することなく、問題をすり換えた形の授業再開に何も疑問をいだかないのであろうか。

学生の大多数は、大学教育に多くの疑問を持っているからこそ、学生大会においてスト権が確立したのであって、全てが政治運動として行なわれたと見るのは、大学人としてあきまわしくない。

へと移行するのである。官憲の力によって学内から学生を追い出し、教員が腕章をつけて巡回するといった警官も警察の行為をもつては問題の解決はおろか、対立を深くするばかりである。これはスト以前にもとよ以外の何ものでもない。三年前の学費闘争の折から大学の改革が調べられ、教授会自身もそれを認め、今回においても改革委員会が作られ、改革案が出されたことと云うことは何を意味するのであるか。改革案の可否は、その実行性云々を問う前に、すでにその様な委員会(工学部)にさえも決定をされていると聞く)を作ること自体、大学側が今までの否を認めているのではなからうか。そのような時点で平常にもどすと云う真意を問いた。

多くの学生は、大学教育に端を発した学園紛争であることと云うことを明確に把握している。それ故、授業再開に対しては、多少の改革に望みを抱いて登校するのである。しかしその解答を教授会は明確にしていない。

現実には、本日はどうであれ、学生不在の授業再開であり、授業再開を宣言し、その講義時間を配列するだけで、後は時の経過が授業時間数の充足を裏付けてくれること云々のである。もはやこれに至っては教育は存在しない。いいたい大学における教員の責任と権威とは、いかなるものかを問いたい。また教員の職分は、どのような位置に置かれるべきか、その責任をどう果たすべきか、教育の責任は、現在

在の大学機構においては、自らが教育した学生の知識に対し、社会的に責任を負うべきであり、その結果としての権威が負われるべきである。しかるにその教育に対する責任(研究に関する責任はここでは含まれないが)は、形式的授業時間の配列と、その時の流れによることし、自らの責任を回避しているし、また、その自覚をも有していない。そのような責任を持たざる者が、なおかつ、教授会なる決議即ち権力行使しての検問・警備を行つたに至っては、明らかなる権力と云ふ名の暴力である。それ以前に、大学における教員にとって、何に対して責任を負うのか、また、適切な権威とは何かを明確にする(11月11日、12日、13日)べき任務である。ただ単に、腕章をつけ、学内警備に当たる(11日、12日)好むと好まざるにかかわらず、

それを行う者の内には特種意識のみを植え付け、本質的な自覚をも思考の外に置いた大学人を生み出し、大学はそのような腐敗した教員を多くかかき入れ、自己の責任をなげき、その責任を拒否する。

明治大学学長 中川常弥殿
明治大学工学部長 高木龍一殿
明治大学学部長 岩本浩明殿